



MAY 2012

No.21

東京大学医学教育国際協力研究センター  
International Research Center for Medical Education

# CENTER NEWS

[www.ircme.u-tokyo.ac.jp](http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp)



左下：東大医学図書館の桜 上・下中央・右下：モンゴル国保健セクター訪問調査時の写真

## Contents

- JICA アフガニスタン本邦研修 ..... 2  
講師 大西 弘高
- シンポジウムの報告 ..... 2  
教授 北村 聖
- オランダ出張 ~ボンペの出身校ユトレヒト大学~ ..... 3  
前講師 錦織 宏
- イギリス出張 ..... 3  
教授 北村 聖
- 台湾での医学教育国際カンファレンス ..... 3  
講師 大西 弘高
- 薬剤師の法的位置づけに関する調査研究：  
韓国での調査に関する報告 ..... 3  
講師 大西 弘高
- ラオスでの JICA フォローアップ協力和ラオス医学雑誌 ... 4  
講師 大西 弘高
- 外部評価受診 ..... 5  
教授 北村 聖
- 客員教員 クラレンス・クライター先生 ..... 5  
前講師 錦織 宏・特任専門職員 三浦 和歌子
- 模擬患者つつじの会 ..... 5  
特任研究員 三木 祐子
- 東京大学医学教育セミナー ..... 6  
講師 大西 弘高
- 東京大学医学教育基礎コース ..... 6  
講師 大西 弘高
- 離任挨拶 ..... 7  
前講師 錦織 宏
- 離任挨拶 ..... 7  
特任研究員 片山 亜弥
- 離任挨拶 ..... 7  
特任研究員 三木 祐子
- センター日誌／編集後記 ..... 8

# JICA アフガニスタン本邦研修

講師 大西 弘高

この本邦研修は、2005～2008年に実施されたJICAアフガニスタン医学教育プロジェクトのフォローアップ協力の一環として2009～2011年度に予定されてきたものである。本体案件実施前の本邦研修1回、本体案件実施中の5回、フォローアップ協力として6回目を数えるに至った。招聘人数は、本体案件前の6名、本体案件実施中の38名は（1回目は6名、2～5回目は8名）、ナンガルハル大学からの2名以外はカブール医科大学（KMU）からであった。フォローアップ協力はKMUから38名、他大学から49名の計87名と地方の教員が多かったが、今回だけはKMUから9名と、半数以上を占めた。現状では、今回のグループが最終となる予定である。

研修内容は、いつも通りではあるが、教育理論や基本的教育技法、カリキュラム開発、PBL（problem-based learning）、臨床教育（アフガンではCBL=Case-based learningとして知られている）、地域基盤型教育、コミュニケーション教育、プログラム評価、大学や医学部の運営・管理を含む。また、今回に限っては、アクションプラン発表会は各自のアクションプランというよりは、今までに研修を受けた人たちのことも含め、アフガニスタンで何ができるのかという点を重視し、それを基にしてカブール側とテレビ会議システムにて議論するという形式をとった。また、それに向けて、アフガニスタンでの医学教育改革におけるニーズを自分たちで吟

味することにも挑戦してもらった。これらの試みは一定の成果を挙げたが、フォローアップ期間終了後も、現地事務所などを通じて引き続き成果を確認していくことになっている。

研修旅行では、地域基盤型教育を主要なテーマとし、三重大学医学部家庭医療学に依頼して2泊3日のプログラムを策定してもらった。最も困難を極めたのは、17名というこれまでに最大の人数を含んでいた点であった。研修員は6つのグループに分かれ、診療所や小規模の自治体病院、訪問診療の様子などを見学した。また、学生や研修医がそういった地域現場で学んでいる場を見る機会にも触れ、地域基盤型教育が今までよりも実感できるようになったようだった。

この場をお借りして、研修でお世話になったJICA人間開発部、JICE（財団法人日本国際協力センター）、東京女子医科大学医学教育学の関係の皆様、講師として授業をしていただいた先生方に厚く御礼申し上げたい。また、研修旅行に同行し、ダリ語での通訳や日本の医療の説明に尽力していただいた小林志保子前東京大学医学部附属病院看護部長にも、深謝申し上げたい。



▲ 三重県立一志病院の訪問看護に同行

# シンポジウムの報告

教授 北村 聖

平成23年度 文部科学省 先導的・大学改革推進委託事業 医学・歯学教育の改善・充実に関する調査研究 医学チーム シンポジウム 「参加型臨床実習をめぐる」

2011年12月2日の午後、東京大学医学部鉄門記念講堂において、上記のシンポジウムを開催した。学生の臨床実習に参加型臨床実習が、できるだけ多くの大学に導入され、定着することを目的とした調査研究のまとめとして開催したものである。

診療参加型臨床実習の導入に向けての提言（九大吉田素文教授）に加え、研修マッチングや専門医研修の選抜の際に活用できるようなログブックの提案（錦織宏講師）、診療参加型臨床実習についての映像による紹介（東京医大太滝純司教授）、自治医科大学（岡崎仁昭教授）及び筑波大学（前野哲博教授）での先進的な試みの紹介があった。

また、大学認証・医学部認証についても講演があった。我が

国では、大学全体の認証はすでに行われているが、医学教育の分野別認証がまだ行われておらず、現状では2023年以降、日本の医科大学・医学部卒業生が米国のECFMG（Educational Commission for Foreign Medical Graduates）を受けられなくなる恐れがある。そのため、2023年までに日本の医学分野別国際認証を取る仕組みをつくる必要があり、今回、この問題に造詣の深い東京女子医大吉岡俊正先生・慈恵医大福島統先生にご講演をいただいた。

参加者は、全国の医学部の教育担当者を中心に、106名で、全体討論では時間が足りないほどの質問、コメントが相次いだ。これらについては、調査研究報告書に詳細を記載した。



▲ 全体討論

## オランダ出張 ~ポンペの出身校ユトレヒト大学~

前講師 錦織 宏

オランダの首都アムステルダムから電車で30分強ほどの場所に位置する街、ユトレヒト。そこに、江戸末期、長崎奉行所西役所医学伝習所において西洋式の医学教育を始めたポンペの出身校であるユトレヒト大学が、その巨大なキャンパスを構えている。今回、文科省先導的の大学改革推進委託事業の一環として、同大学における臨床実習の実態調査を行った。

人口1630万人を抱えるオランダでは、医学部は全国に8校存在する。毎年入学する医学部生の数は2850人であり、また男性と女性の比率はおおよそ3:7である。一般に、医学部に入学する時期は日本と同様に高校卒業後であり、卒前教育は6年間であるが、学士入学向けの4年間のカリキュラムも存在する。

オランダの医学教育は英語圏の医学教育の潮流の影響を大きく受け、マーストリヒト大学でPBL主体のカリキュラムが構築されたり、近年はカナダのCanMEDsを用いたコンピテンシー基盤型医学教育カリキュラムを取り入れている。また国家試験がない点は他の欧州各国と類似している。臨床実習では、疾患頻度の観点から市中病院で多くの臨床実習を行っている点は我が国の現状と似ていると感じた。その他詳細は報告書を参照されたい。



▲ 医学教育学講座のOlle ten Cate教授と筆者

## イギリス出張

教授 北村 聖

文部科学省委託研究医学・歯学教育の改善・充実に関する調査研究の一環として、英国の医学教育の現状の調査を行った。今回は特に、この分野で先進国である英国における医学部認証の状況を視察した。事例としてキングス大学医学部で、医学教育プログラム認証の推移と現状の認証過程について調査した。英国ではTomorrow's Doctorsという基準ののちで医学教育プログラムが各大学で策定され、それをGeneral Medical Council (GMC)が外部評価するシステムになっている。さらに、2010年にQuality Improvement Framework(QIF)が公表されこれののち、質保証(認証)の詳細が決められた。この新しいシステムによる認証はまだ始まったばかりであるが、1年間にわたり、8回程度の訪問調査や、調査員には医学教育の専門家に加え法律家や学生も含まれていること、あるいは指摘に従って改善した内容の公表など我が国とは全く異なったシステムを学ぶことができた。

わが国では、設置基準による大学設置が一番高いハードルであり、分野別認証は医学教育の分野では全く行われていない。医学教育の国際化に乗り遅れないためにも分野別認証は緊急かつ重要な取り組みと考えられる。



▲ King's大学 Dept.of Primary Care and Public Health Sciences 武田裕子先生(左:当センター前准教授)

## 台湾での医学教育国際カンファレンス

講師 大西 弘高

2011年11月19~20日に、国立台湾大学医学部(台北市)において、表記会合が行われた。テーマは「医学教育の国際化と地域性(globalization and indigenization of medical education)」であった。私は、この会合に招聘され、日本の医学教育の個性について講演を行った。他にも、韓国、シンガポール、中国、香港といったアジアの諸国、カタール、カナダといった他の地域からの講演者が招聘されていた。

この会合の企画を中心的に行ったDr. Ming-Jung Hoは人類学を専門とし、台湾のプロフェッショナリズムが、西洋諸国のそれとどう異なるのかについて、国内のステークホルダーの意見集約をノミナル・グループ法によって実施したという報告を行った。そして、excellence, humanism, accountability, altruismといった概念の上に、integrityという概念が来るのが台湾の医師プロフェッショナリズムの特徴であると述べた。また、このような概念について、現場で働く医師の動画を学生に見せ、教育を行った様子も示されていた。このような台湾での研究、教育のアプローチは、非常に洗練されたものであり、参加者の多くが感銘を受けていた。全体ディスカッションでは、東アジアを中心とした国々において、西洋とは異なった医学教育が必要だろうという意見で一致し、今後の協力を互いに約束することとなった。



▲ プロフェッショナリズムに関する動画一場面

## 薬剤師の法的位置づけに関する調査研究：韓国での調査に関する報告

講師 大西 弘高

神戸学院大学薬学部の内海美保先生、山元弘先生、同法学部から東京学芸大学に異動された佐藤雄一郎先生らと共に、昨年度まではわが国での薬剤師の調査を行い、今年度は英国、韓国での調査を追加することになった。わが国では、医師が医行為に関する権限を持ち、看護師はその補助(相対的医行為)を行い、薬剤師は独占的に調剤を行う立場である。2006年から薬剤師の6年制カリキュラムが開始され、薬剤師による相対的医行為については、特定看護師制度などと共に議論中である。英国ではこれら3業種の業務範囲が特に地域で重なり合っており、処方権限を与えられた薬剤師も機能し始めていることが明らかになった。

韓国では、2009年に6年制カリキュラムに全面移行し、薬学部数、薬剤師数を増加させる政策がとられつつある状況が浮かび上がった。また、以前は薬剤師が処方薬を含めて選択して販売する形をとっていたが、その権限が制限された後は、薬局での一般用医薬品(OTC)の販売において独占的な権限を持つに至っている。ただOTC販売の権限を、日本と同様に登録販売者にも付与するシステムや、薬局外でも一部販売できるシステムの導入が議論されていることも知るに至った。



▲ 成均館大学薬学部の模擬薬局

# ラオスでの JICA フォローアップ協力とラオス医学雑誌

講師 大西 弘高

表記プロジェクトでは、プロジェクト目標や成果指標は概ねほぼ達成された。ただ、セタティラート大学での運用は定着したが、他の教育病院や地域病院での運用は開始されたばかりであり、制度として定着されるには、更なる改善や継続したトレーニングが必要であり、これまで技術協力した内容をフォローする必要があった。具体的には、保健省・保健科学大学関係者を巻き込んだ議論の場（例えば、全国的な医学教育に係るワークショップ、セミナーなど）の支援が急務であり、本体案件終了後、長期にプランクが空く前にてこ入れすることが肝要と判断された。よって、ソフト型フォローアップ業務実施契約簡易型という枠組みで、大西講師が総括／医学教育の専門家として、2011年11月29日～12月21日、2012年1月18日～2月2日の2回現地へ派遣され、保健省、保健科学大学、ピエンチャン市内4教育病院と5県病院からの関係者を集めて、2回のセミナーとワークショップを開催した。また、北村教授は2012年1月19日～2月2日に同行し、これらの取り組みを補助すると共に、ラオス医学雑誌に関する状況を確認し、今後の方向性を探った。

12月9日には、ラオス側のメンバーが独自にカムワン県病院で5日間のワークショップを実施するというで見学すると共に、「世界の医学教育のトレンド」という講演をさせてもらった。2007～2010年のプロジェクト後半では、学生実習を県病院で展開するために多数のFDを展開してきたが、その流れがラオス側に引き継がれ、独自予算でのワークショップ実施ができる体制になっていることが窺え、サステナビリティを確認することができた。また、MTUやTMCは以前と同様に機能し、セタティラート病院には国際クリニックも完成した。保健科学大学には新棟が完成し、医学教育センターも機能し始めている。

12月19日に保健科学大学で開催した第1回セミナーでは、本体案件にて普及してきた臨床教育のチームアプローチ（現地ではMTU: medical teaching unitとTMC: training management committeeとして知られている）が特に県病院で上手く根つき、よい制度であると認識されている様子が明確になった。このような現状を、今後も確立されたものにしていくため、臨床教育ガイドラインを策定することが話題となり、大西がその重要なガイドラインを英語で下書きすることになった。

1月25～26日にピエンチャン県タラートで開催したワークショップでは、臨床教育ガイドラインの下書きを基盤とし、このようなガイドラインが必要かどうかについての議論を推し進めることになり、現状の問題を改めて議論してもらった。県病院も含めた教育病院側から多くの意見が出され、問題点は以下の3点にまとまった。①教育用の部屋・予算・教員・教材・コンピューターやインターネット・図書や図書館などのリソースの圧倒的不足、②保健省や大学から教育病院に学生を送ることに、業務・責任分担などの不明瞭さ、③卒業に向けた総括的評価の内容やシステムの不明瞭さである。これらを改善するために、ガイドラインが議論の取りかかりになるとの意見で一致した。なお、この後修正を加えた臨床教育ガイドラインは、①教育施設：ガバナンスと管理、学術的環境、②臨床実践とその教育：教育目標、教育病院の定義・臨床教育の枠組み・臨床の実践活動などの全体構造、教育方法、スケジュール・総括評価・学生支援などのカリキュラム管理、プログラム評価、



▲ ラオス医学雑誌第2巻

③指導医、④教育資源という内容で構成した。ガイドラインに従えばよいという押しつけの内容ではなく、ラオス側で、教育病院、保健科学大学、保健省がそれぞれどのような責務を担うべきかの議論を促す形にした。

1月30日に保健省およびセタティラート病院で開催した第2回セミナーでは、臨床教育ガイドラインの修正版を供覧した。また、セタティラート病院前院長および保健科学大学前学長であった Dr. SomOck 保健副大臣を交えて、上記のような問題点を再確認し、解決の方向性を探った。保健省や保健科学大学が今まで以上に様々な役割を担う必要があること、大学では教育開発センターが教育の全権を握って改善を図ること、教育病院の教育機能を見直すことといった方向性が打ち出された。改めて臨床教育ガイドラインが不可欠であることが確認され、大西の書いた内容を基盤にして2～3ヵ月以内には省令として発行する方向となった。

ラオス医学雑誌 (Lao Medical Journal: LMJ) は、ラオスには医学雑誌が一冊もないという状況を現地派遣中の2008年に知った北村教授が、センターの資金により医学雑誌作成をサポートするプロジェクトを立ち上げようと発言し、取り組みを開始したものである。2009年度に、学内基金の海外学術交流拠点設置・運営経費助成を受け、東京大学医学教育共同研究センターをラオス保健科学大学内に設置し、LMJ立ち上げの資金および技術協力を行うこととなった。ラオス側は、Sing 副学長をリーダーとし、LMJ編集委員長が Dr. Mayfong、事務担当者が Dr. Sysavanh という3名のメンバーが関与している。2009～2011年度に100万円を供与し、2010年度に第1巻、2011年度に第2巻が発刊されるに至った。また、第3巻についても、あと1編論文が集まれば刊行できる状態にあるとのことであった。



▲ ナカイ郡保健局、郡病院でのインタビュー

## 外部評価受診

教授 北村 聖

2012年（平成24年）3月15日に、医学教育国際協力研究センターとしての外部評価を受診した。センターとしては設立以来2度目で、今回は2007年（平成19年）1月に受けている。今回は、前回以降5年以上が経過したこと、アフガニスタン、ラオスのプロジェクトが一段落したこと、人事に異動があったことなどから、区切りとして最適と考え受診した。

評価委員は委員長を高久史磨先生（自治医科大学学長）にお願いし、委員には、伴信太郎先生（名古屋大総合診療科教授）、渡邊学先生（国際協力機構人間開発部）、吉岡俊正先生（東京女子医大副理事長）の諸先生にお願いした。

センターからは山本一彦 センター長以下、教員全員が参加した。

まず、当センターよりこの5年で発行した報告書等の閲覧、センター内の設備見学、教員へのインタビューなどを行い、評価を受けた。とくに、教員による自己評価については多くの質問があり、詳細なコメントが求められた。

その後、評価委員だけによる議論があり、最後の講評では、概ね良い評価であり、国際協力と東大の教育に対する支援のバランスをしっかりと取っておくようにということがもっとも大きなメッセージであった。

具体的な評価としては、医学教育研究の質の向上という点については、医学教育分野での発表論文が増加し評価できるものの、国際

協力事業に関する研究活動がさらに望まれると指摘された。医学教育の実践に関する評価では、外国人教員の活動や、FDなどが高く評価された。今後、東大の教育評価をも実施することが望まれた。国際協力の推進、業務運営管理については指摘された大きな問題は少なかった。以上をまとめた外部評価報告書は現在作成中である。

東京大学においては、学内のセンターに対する見直しが全学的に行われている。その一環として当センターが良い方向に評価されることは極めて重要であり、この度外部評価を行ったが、この結果を受けて、また運営委員の先生方にご相談させていただき、将来に発展する方向を目指したい。



▲ 外部評価の様子



▲ 外部評価委員の先生方

## 客員教員 クラレンス・クライター先生

前講師 錦織 宏・特任専門職員 三浦 和歌子

2011年7月から11月まで米国アイオワ大学からクラレンス・クライター教授をお迎えした。クライター先生はアイオワ大学大学院で心理統計学分野の博士号を取得した統計学の専門家である。1993年から医学教育研究に本格的に携わるようになり、臨床技能の評価、入学試験の評価、ベイズ理論などを主な研究分野とする。当センター主催の医学教育セミナーでは「医学教育評価における全体像を理解する：学習者評価が学生の学習に与えるインパクトの量的解析」をはじめとする3回の講演を行った。また学内外の医学教育研究者に多くの助言やサポートをしてくださった。先生はドイツ人を祖先とする農家に5人兄弟の末子として生まれ、少年時代は夜明けから日没まで農作業に勤しんだ。アイオワシティのご自宅からわずかな距離で広大な自然に親しむことができ、夏はカヌー、冬は狩猟を楽しまれる。関心は絵画にも及び、中でも17世紀オランダ絵画に造詣が深い。先生は若い頃から難聴を患い、ついには全聴力を失ったが、一昨年人工内耳の手術により機器を装着すれば聴こえるようになった。失聴したことで生活に多少の影響はあっても、音のない世界で研究に没入できるのだと語った。研究者としての強靭さが窺える話である。



▲ クライター先生(東大本郷構内、2011年11月)

## 模擬患者つつじの会

特任研究員 三木 祐子

これまで当会の模擬患者は、学生の授業、OSCE、当センターのアフガニスタン本邦研修、看護学の授業参加（研究のために構築したオプション授業）等に参加した。今年度はそれらに加え、当センターの北村聖教授がOSCE場面における標準模擬患者を紹介するテレビ番組に当会の模擬患者が1名出演した（「話題の医学：医療系大学間共用試験について（後編）－OSCE－」TV東京7ch）。当会は発足4年半とまだ歴史は浅いが、模擬患者の活動域が全国？にまで拡大したことは当会全体の士気を高めるきっかけになったと思う。

また、通常の勉強会の他、当センター主催のセミナー、岐阜大学医学部医学教育開発研究センター（MEDC）主催のセミナーとワークショップ、医学教育学会等の案内を通じて、模擬患者の自主的な学習や他組織模擬患者との交流の場を提供した。

現在、新規模擬患者を2年ぶりに募集中である。来年度は、先輩模擬患者が屋根瓦方式でメンター役として新人を指導しつつ、これまでの模擬患者としての役割・使命や活動を振り返り、さらに会を盛り上げるきっかけになればと期待している。



▲ アフガニスタン研修における模擬患者参加

# 東京大学医学教育セミナー

講師 大西 弘高

以前より当センターの外国人客員教員などによって開催されていたセミナーは、東京大学医学教育セミナーという統一名称となり、2008年7月より原則月例の講演会となった。開催は、平日18時と決めているが、これはほぼ固定されたと考えてよいだろう。内容としては、医療専門職の教育に関する最新の情報をお伝えすると共に、議論の場を提供するようにしている。テーマは、医学系のみならず、多職種にわたる内容、より理論的な背景に関する内容なども含み、多岐にわたっている。

2011年4月から開始したUSTREAMを用いた中継配信は、時にはトラブルも生じているが、好評を得ているようで、遠方の方々からも「見えていますよ」と声をかけていただく機会が多い。同時中継は、ライブ感に溢れたものと言えるほどではないと思われるが、遠隔教育という観点から、当センターに新たな知見や経験を与えてくれる試みになっている。また、同時中継時に視聴できなかった方にも、その後いつでも見られる形で動画が残る（この

サービスは、動画の保存に同意していただいた講演者においてのみ提供）。最近、来場者数が増えており、以前よりもセミナーについて知っていただく機会が増えたのかもしれない。



▲ 活況を呈する第41回セミナー

開催日	テーマ	講師
第38回 2011.10.7	医学部受験者における人間の判断の役割を理解する：面接、入試委員会、経験的モデルに共通する価値の達成	クラレンス・クライター 東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授 米国アイオワ大学医学部医学教育研究支援室教授
第39回 2011.11.11	医学教育における臨床推論評価：歴史、現状アプローチ、将来の方向性のレビュー	同上
第40回 2011.12.20	医学教育部門専任教員としての働き方～実践と科学と政策と～	錦織 宏 東京大学医学教育国際協力研究センター講師
第41回 2012.1.20	チーム医療の推進について	坂本 すが 公益社団法人日本看護協会会長
第42回 2012.2.29	医療面接の評価法：医療コミュニケーション研究からの示唆	石川 ひろの 東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻 医療コミュニケーション学分野准教授
第43回 2012.3.14	参加型臨床実習を実現するために	大西 弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター講師

# 東京大学医学教育基礎コース

講師 大西 弘高

医学教育基礎コースは、当センターで2011年4月より東京大学医学部のFaculty Development (FD)の一環として開始した月例の医学教育の勉強会である。基本的には、中堅～若手教員・新任教員を対象としているが、学内教員で定員の20名が埋まらない場合、学外の医療者教育関係者も参加可能とした。各回18～20時の2時間で、日付、タイトル、担当者は表の通り。

10月以降は、やや参加者数が少なく、数名程度で推移した。広報の時期が遅れ気味となり、参加者の都合がつかなくなっていたのが主な理由だと思われる。また、1年を通じてのコースで、医学教育の一通りの内容を伝えたいという担当者側の意図はあったが、内容が参加者のニーズに合致していたかどうかについては、再検討した方がよいだろう。2011年度は、1日がかりの学内FDをこの基礎コースで置き換えた形だが、今後FDについてはそのような1日がかりのものも、学内教員による討論を促すために実施するというのが2012年度の方向性になりそうである。よって、基本的にはこの基礎コースを2012年度も継続していくことにしたい。

参加者にとっては、少人数で十分なやりとりができ、比較的満足度の高いセッションになっていた可能性が高い。学外の参加者には、遠方からも来ていただき、また歯学部、薬学部の教員の方もおられたのは特筆すべきことだろう。

## 東京大学医学教育基礎コース開催実績

	日付	タイトル	担当
第6回	10月17日(月)	MCQ形式の問題の作成の仕方～国家試験方式の良問を作りましょう～	北村
第7回	11月16日(水)	プロフェッショナリズムの教育	大西
第8回	12月13日(月)	学習における内省（振り返り）	錦織
第9回	1月6日(月)	技能教育とOSCE	北村
第10回	2月15日(水)	臨床推論のできる医師を育てる	大西
第11回	3月7日(水)	地域志向型医学教育	孫

## 離任挨拶

センター前講師、現客員研究員  
京都大学医学教育推進センター准教授  
錦織 宏

2007年10月から2011年12月まで医学教育国際協力研究センターで教員として勤めさせていただき、この度、2012年1月1日付けで京都大学医学教育推進センターの准教授として異動することとなりました。4年3ヶ月の間お世話になりました全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

思えば2007年の夏、まだ英国留学中に前任の武田裕子先生からいただいたメールから、私のセンターでの生活が始まりました。もともと臨床志向が強かったり、東京大学とご縁があまりなかったりしたこともあって、当初は正直戸惑いもあったのですが、4年経った今となっては、非常に貴重な経験をさせていただいたと感じています。

センターでは本当にたくさんのことに関わってきましたが、特に学生教育に関わったことは楽しい経験でした。それまでは総合診療の分野で卒後研修の場を中心に活動してきたので、自分の医学教育に関する活動の広がりが出たように思います。また研究をコツコツと進めることができ、医学教育研究者として独り立ちできるようになってきたことも、大きな収穫でした。現場主義者らしくアクションリサーチに惹かれ、科学哲学を勉強しながら論文を何本か書くことができたこと、そしてそれを後進に伝えることが出来るようになったことは、大きな自信につながりました。さらに、他人の意見を聞いてそれを多様性の一つとして受け入れ、その上で自分の考えを適切に相手

に伝えるという対話能力を、様々な活動を通して身につけることができたことも、センターで得たものです。これは東大という環境において研究者としてのプロ意識が育ったためだろうと考えています。

自分のキャリアはAcademic GP(General Practitioner) & Medical Education Researcherに落ち着きつつあり、今後も、臨床医として働き、教育を熱心に行い、医学教育に関する研究を行っていきたく考えています。また医学教育専門家としては、「実践と科学と政策を適切に往復する」というモデルを目指し、「(診療・教育の)現場から離れず、科学的な視点を大事にし、かつ政策にもある程度関わる」ことをやっていきたいと思っています。

最後になりますが、自分に自由な活動をさせてくださった北村聖先生、また様々にサポートしてくださった三浦和歌子さんをはじめ、在任中に関わった全ての皆様に再度感謝申し上げます。また医学教育界にはこれからも関わっていきますので、引き続きの御指導をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。



▲ 医学教育のあり方について一緒に悩んでくれた学生さんと先生方

## 離任挨拶

片山 亜弥  
(特任研究員：2007年7月～2012年3月)

2007年7月に着任してから2012年3月までの4年9ヶ月間、皆様には大変お世話になりました。とても温かく親切な皆様とともに、毎日働きやすい環境でお仕事させて頂きまして、気付けば、自分の人生で最も長く勤務した職場となりました。

在職中は、インドネシア、アフガニスタン、ラオスに対する国際協力プロジェクトに携わり、前職の国際協力銀行(JBIC)では経験できなかったことを数多く学ばせて頂きました。着任早々、インドネシア大学での調査のためにジャカルタに出張する機会を頂いたり、アフガニスタンやインドネシアからの研修員を受け入れたり、大学の職員として国際協力に関わる貴重な経験をさせて頂きました。また、プロジェクトを実施するだけでなく、その成果を知の蓄積として論文や報告書に残すことの大切さや楽しさを学ぶことができたことは、私にとって大きな財産となりました。ご指導頂きました北村聖先生と大西弘高先生には心より感謝いたします。また、事務員の方々からも、学内の庶務や経理など慣れない業務について、数多くのサポートを頂きました。皆様の温かく優しいご支援があったからこそ、これまで楽しく働くことができたこと感謝しております。心より御礼申し上げますとともに、センターの益々の発展と皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

三木 祐子  
(特任研究員：2008年1月～2012年3月)

2008年1月1日に着任し、4年3か月間特任研究員として大変お世話になりました。私のセンターでの使命は医学・看護教育の業務・研究でしたが、着任前は看護職として臨床・行政・企業に就いていたため、着任早々、錦織宏先生(前センター講師)より業務のお話を頂いた際、「オスキー(OSCE)って何のことですか?」とお聞きした程、教育に関して無知の状態でした。

着任3か月後、北村聖先生より模擬患者養成の依頼を受け、東京医科歯科大学と「模擬患者つづしの会」の合同養成に企画させて頂きました。私自身、プロジェクトの企画運営は初体験、模擬患者活動に関する知識も非常に乏しい立場でしたが、センターをはじめ、模擬患者養成や教育のパイオニアでおられる他大学の先生方のご教授ご支援、また模擬患者の皆様のお陰で、会設立後3年半の現在、会員数や活動も拡大しつつあります。

一方、北村聖先生をはじめ、教職員の皆様の看護学に対するご関心とご理解のお陰で、文科省の科学研究費挑戦的萌芽研究にも採択頂き、看護学における模擬患者参加型教育の検討・実施を通じ、看護学の専門性、教育の資向上等を考える有益な時間を頂き、大変感謝しております。センターの皆様とのご縁を大切に、今後、医学・看護教育における協働ができますことを願っております。そしてセンターの更なるご発展を心よりお祈り申し上げます。

## ● 今後の外国人客員教員招聘スケジュール

東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授として次の先生をお迎えする予定です。

ジェフリー・ワン (Jeffrey G. Wong, MD, FACP)

現所属：米国 サウスカロライナ医科大学 内科学 教授

招聘期間：2012年10月～2013年3月(予定)

外国人客員教員の招聘にあたり、米国財団法人 野口医学研究所に多大なご支援を賜りました。

この場を借りて感謝申し上げます。

## ● センター日誌 | 2011年10月～2012年3月 |

10 OCT		1 JAN	
3日(-10月27日)	平成23年度第1回アフガニスタン医学教育研修受け入れ	6日	第9回東京大学医学教育基礎コース
7日	第38回東京大学医学教育セミナー (クラレンス・クライター 東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授)	17日	第41回東京大学医学教育セミナー (坂本すが 公益社団法人日本看護協会 会長)
12日	「模擬患者つづしの会」自主勉強会	18日(-2月2日)	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西)
17日	第6回東京大学医学教育基礎コース	19日(-2月2日)	JICAラオスプロジェクト現地活動(北村) 補助
26日(-1月25日)	臨床診断学実習(第2回医療面接実習)実施	2 FEB	
26日(-12月21日)	臨床診断学実習(HDPE 身体診察診断学実習)実施	4日	東京大学医学部共用試験 OSCE 実施
11 NOV		6日(-3月8日)	平成23年度第2回アフガニスタン医学教育研修受け入れ
2日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会・健康講座	15日	第10回東京大学医学教育基礎コース
11日	第39回東京大学医学教育セミナー (クラレンス・クライター 東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授)	29日	第42回東京大学医学教育セミナー (石川ひろの 東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 医療コミュニケーション学 分野 准教授)
16日	第7回東京大学医学教育基礎コース	3 MAR	
29日(-12月21日)	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西)	7日	第11回東京大学医学教育基礎コース
30日	平成23年度第2回運営委員会	14日	第43回東京大学医学教育セミナー (大西弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター講師)
12 DEC		15日	外部評価
2日	平成23年度文部科学省 先導的大学改革推進委託事業 医学・歯学教育の改善・充実に関する調査研究 医学チーム シンポジウム 「参加型臨床実習をめぐる」	16日	平成23年度第3回運営委員会
20日	第40回東京大学医学教育セミナー (錦織宏 東京大学医学教育国際協力研究センター講師)	19日(-4月11日)	モンゴル国保健セクター情報収集・確認調査(大西)
13日	第8回東京大学医学教育基礎コース	28日	「模擬患者つづしの会」定期勉強会

### 編集後記

青葉若葉が目まぶしい季節となりました。

さて、センターの平成23年度後半の活動は、医学教育基礎コース・医学教育セミナーに加え、アフガニスタンから研修員の先生方を迎えての本邦研修が10月と2月に2回、その他、5年の集大成として3月に外部評価を受けました。無事に平成23年度を終えることができ、皆様のご理解とご協力が心から感謝申し上げます。

今年度も実りある充実した活動報告ができますよう、センター一同日々邁進していきたいと存じますので、引き続き何卒よろしくお願ひ申し上げます。(内)

### 発行元

発行 2012年5月15日  
 発行人 山本 一彦  
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター  
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254  
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp  
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp  
 印刷所 株式会社トライ